

野山の花

— 身近な山野草の食効・薬効 —

城西大学薬学部 白瀧 義明 (SHIRATAKI Yoshiaki)

サラシナショウマ *Cimicifuga simplex* (Wormsk. ex DC.) Turcz. (キンポウゲ科 Ranunculaceae)

夏が去り、秋の気配が漂う野山を歩いていると、まるで試験管ブラシのような長くて白い総状花序をつけた草本を見ることがあります。これがサラシナショウマです。本植物は新芽を軽くゆで、水にさらして食用にし、また、葉は麻に似て、性が上升（昇）する（上に成長する性質がある）ことから「サラシナショウマ（晒し菜升麻）」と名付けられたそうです。

サラシナショウマは日本、千島、サハリン、カムチャッカ、シベリア、中国東北部、朝鮮半島、モンゴルなどの山地や草原に生える多年草で、高さ1～1.5m、葉はかなり大きく長さ35～55cm、互生し長柄があります。下の方の葉は3回3出複葉、上部は2回3出複葉となり、小葉は卵形、先端はとがり、辺縁は鋭浅裂、両面に短い毛をまばらにつけ、8～10月ごろ分枝した枝先の長い総状花序に長さ5～10mmの花柄のある白い小花を多数咲かせます。地上部の茎葉が枯れる11月頃、不規則な黒褐色の塊状で横にのび細い根を多数出した根茎を掘り取り、茎葉と細根を除いて水洗いし、日干しにしたものをショウマ（升麻、*Cimicifugae Rhizoma*、黒升麻、真升麻）とよび、民間では、風邪で熱があり、頭痛のする扁桃腺炎や口中の腫れものなどに、煎液でうがいをするとう熱が下がり、のどの痛みや口中の腫れものが軽減し、また、ウルシかぶれ、あせも等の湿疹、かぶれには患部を冷湿布すると良いとされています。漢方では、解熱、解毒、浮腫抑制薬として乙字湯、升麻葛根湯、補中益気湯、辛夷清肺湯などに使われます。成分はトリテルペノイドのcimigenol（シミゲノール）やクロモン誘導体、桂皮酸誘導体などが知られています。



写真1 サラシナショウマ (花)



写真2 サラシナショウマ (葉)



写真3 イヌショウマ (花)



写真4 レンゲショウマ (花)



写真5 生薬：ショウマ (升麻)

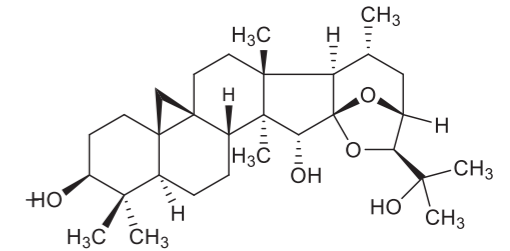


図1 cimigenolの構造式

生薬のショウマには、中国産の北升麻の基原植物である興安升麻 *C. dahurica* をはじめ、基原植物が数種類あります。その他、日本に自生するショウマと名のつく植物にはイヌショウマ *C. japonica*、オオバショウマ *C. acerina* var. *acerina*、レンゲショウマ *Anemonopsis macrophylla* などがあり、レンゲショウマは1属1種の日本固有種で、東北地方南部から中部地方までの低山から亜高山の林の中に生え、根生葉は2～4回3出複葉、小葉は卵形で、長さ4～8cm。花は大きな円錐花序にまばらにつき、直径3～5cmと大きくて美しい。

アメリカ産の升麻 (black cohosh, black snakeroot) の基原植物は *C. racemosa* Nuttall で婦人病薬にされます。また赤升麻といって本品に代用されるものにはユキノシタ科のアカショウマ *Astilbe thunbergii*、トリアシショウマ *A. congesta*、アワモリショウマ *A. japonica*、チダケサシ *A. microphylla* 等の根茎があり、サラシナショウマとは全く異なったものです。